

ならば、參考にするやうな事が、澤山ありましたらうけれども、先づ私のきいたのはかういふものでありました、此のねぢーさんにしてこの小供に適する體育を施されたならば、如何に圓滿な發達をするであらうかと、誠に氣の毒でたまりませんでしたが、かゝる育て方をへて來たのですから、學校に來て他の薪をさき炭を負ふというよゝな育て方の小供と同一視されて、活潑に活潑にといはるゝのも、なるほど苦しくてたまりなかつたでありましたらう、世の育児者には、兒童は溫厚なるよりは、寧ろ粗暴に傾くほど活潑なのはよいというて、弱い兒童をしてその依て來る所をも確めず、夫れ遊べ夫れ駈けよ、未來の日本軍人が、夫れではいけないなどゝ、一も二もなく獎勵する人があるときいたが、勿論さうなけらねばならぬまで

はあるけれども、中には今のよゝな育て方の小供もありますから皆平等にやられたものでありませぬ、夫れだから一人の兒童にしても、その一言一行みな其の由る所を究め其の源から大に改良するとも、獎勵するともしなければならぬと思ひます、一向前後のまどまりもない事ではございませんが、小供を育てる方々の、少しでも參考とならば、私の満足する所でございます(二元)

白露の色は一つをいかにして

秋の木の葉を千々に染むらん

富士南麓地方の子守歌

駿河 西村和一郎

一、ねんねんよー、かんかんよー、わしらんお坊ちゃんを、誰が、かまつた、誰もかまひもせぬ

けど一人で泣くには、しよがない。ねると根方へ、くれてやる、起きると、興津へくれてやる、泣くと長持を背負せるぞ、ねんねんよー、かん

くよー」

全 園歌

二、向ふの藪で、光るは何だ、蟲か螢か、螢か蟲か、蟲でもないが、星でもないが、やましるれせんの子で、ござる二子で、ござらば御供を申せ、御供にはぐれて、だいがくちゆへ、一軒設けて、やけ家を建てゝ。彼方を向いては、泣かれ、此方へ向きては泣かれ。父も母も、小石じやないか。わしられせん、くれたものは櫛に簪、御髪のお、つけて結はして、後からみれば、髻が三寸、島田が四寸、先づ

「一かん貸せ申した」

三、一や二や三や四のおみやのからくり、かきどの吉原茶碗すこのいて二つに、われる、どーしましよ。こーしましよ」

四、たんよー一つ打つけたんよー、二つぶつけたんよー三つぶつけたんよ、四つぶつけたんよ、五つぶつけたんよ、六つぶつけたんよ、七つぶつけたんよ、八つぶつけたんよ、九つぶつけたんよ、十どぶつけたんよー」

五、れしろのさーの、おんさのさ、れんさのらいしも、おてきでぶつとて、れねぶろころんで、れ茶碗蹴からかして、いちーやはかくーいちーやさかどん、さいたかどん、しのぶかどん、どんどやの神さん、何の神さん、此處は船橋、箱根の一、二、三、四、五つもの姉さん友がないとてれ尋ねなさる、友は丹波の助太郎様よ。助

けた土産に何く貰つた。一にや、小箱、二にやまた手箱、三にやさし櫛、しのべの枕。五ばん簪、六ばん前垂、しめて七ばん、さやの帯、絨子の帯、先づ一かん貸せ申した」

六、ひめさん、とよさん、ひめさまへから、御手紙、参つたどて、何といつて参つたどて、今日、今晚、御日待やらうと向ふ見れば、白壁ずくしの、若い暖簾が、かゝつた。私佐野屋の絹絲少女のおみね様に渡し申しましょ」

七、今日も、よき日だ明日も好き日だ私らが隣の恵比須講によばれて、行つたら、紅鯛の吸物、蒔繪の御膳で、柳のれ簪で、一杯吸はしよ、二杯吸はしよ。三杯目には、溢れて、こぼれて、御寺のდანから、お鼻くく鼻づかみ、ねびんくくびてなで、ねたばくく包づか

六十四  
み、ねかねを附けましょ、お紅を附けましょ。御白粉を附けましょ、先づ一かん貸せ申した」

八、ざくろく、つかみざくろ、ねしやくどしめて、よをしめて、花は千咲く實は一つ毎朝く手をたゝき、じーんく地拂ひや此の地を拂つて一匁」



九月の天地

まか生

昨日まで早苗どりしが何時の間に庭の芭蕉のれ